巻 頭 言

「専門バカ」になる！

諸泉利嗣[1]

私はこの職業に就く前，おそらく高校生の頃から，研究者になれるのならよい意味での「専門バカ」になりたいと考えていた．そういう姿勢に憧れさえ抱いていた．ここで言う「専門バカ」とは，「一つの研究テーマを一生追い続け，徹底的に専門を究める」という意味である．それに対する思いは，正直なところ今も変わらない．

では，現実はどうなのか．どうやら，最初に抱いていた憧れとは違った方向へ進んでしまっているようだ．そもそも「専門」とは何なのか．当初の憧れが間違っていたのか．私の研究生活は残すところ 10 数年と迫ってきた．今更何を言っているのだとお叱りを受けるかもしれないが，残された時間を有意義に過ごすためにも，専門を究めるとは何かについて自身のこれまでの研究を振り返りながら考えてみたい．

研究者ならば誰でも，「私の専門分野は○○○です」と自己紹介することがよくある．ここ 10 年間，土壌物理学会で事務局と編集委員長を担当させていただいたことから，さしずめ「私の専門は土壌物理学です」とすべきところ，残念ながら自信を持ってそう言えない．土壌物理学の範疇にある研究テーマを追い続けているとは言いかねるからだ．

いつの頃から，このようになってしまったのだろうか．学位を取得するまでは，土壌中の熱・水同時移動について研究しており，確かに土壌物理学が専門分野と言えた．この研究を進める過程で，地表面境界条件にエネルギーフラックスを設定する必要が生じた．身近に教えを請う人がいない環境下にあったため，文献を頼りに熱収支や微気象の勉強をし，観測システムも一人で作った．熱収支や微気象も，いったん研究し出すととても魅力的で面白い．さらに，室内実験と野外実験に加えて，数値解析も行うことにしたので，有限要素法の勉強に励みプログラムコードも自分で作成した．

このように，学位論文に関係する研究を通して，関連する様々な知識を吸収し研究の基礎とすることはよくあると思う．その後，その中から研究テーマを絞り込み専門性を究めていく，あるいは，それらを踏まえた上で全く別のテーマに着手し，その専門性を追究していくこともあるだろう．私の場合は生来の気の多い性格もあって，土壌中の水も熱も，熱収支も微気象も，さらに数値解析もと興味は尽きず，あげく迷走し始めていた．

ここ 10 年ほど複数の大型プロジェクト研究に参加する機会を得た．そこで貴重な経験をさせていただいた上に業績も上がり，他分野の研究者とも多く知り合うことでたいへんな刺激を受けた．ただ大型のプロジェクト研究の場合，分担したミッションに自身の専門分野がぴたりと当てはまればよいが，そうでない場合もある．私の場合は，どうやら後者が多かった．徐々に研究対象分野の微調整を強いられる傾向にあった．具体的には，「衛星データを用いた広域実蒸発散量の推定」や「東南アジア大都市における水収支構造の評価」に取り組んだ．それ以来，このテーマをきっかけに，蒸発散推定手法の開発・改良に取り組んでいるが，もちろん，土壌物理学に関わる課題も継続している．二束の草鞋状態だ．一方，例えば HYDRUS の開発者のように数値モデルの開発改良だけに専心している研究者もいる．そのような研究者が大型プロジェクトに参加する場合は，その専門性を期待されてのことが多い故，無理なく研究を進めることができるに違いない．

かつて，岩田進午さんは「研究者として基礎的な課題と応用的な課題を持っていると，片方が行き詰まったとき頭を冷やせるから時間がとれる」と生前話されていたという．また，水文・水資源学会元会長の椎貝博美山梨大学学長（当時）が，「成果が見込める課題と挑戦的な課題の両方とも大事ではないか」と学会誌で述べておられた．いずれも，少なくとも研究テーマを２つくらいは同時期に持つのが良いとの考えが共通している．もちろん，一つの専門の範囲内でということが大前提であろう．

学位取得後から継続して同じ研究テーマを追い続ければその分野ではプロにはなれる．しかし，従来の研究者にありがちな「専門バカ」を養成し続けるのは，時代錯誤であると言わざるを得ず，研究テーマによっては研究資金の獲得もしにくいだろう．一つの専門分野を究める，あるいは状況に応じて対応していく，どちらが正解というものはない．望遠レンズを伸ばして一本の木に焦点を絞るも良し，広角レンズに付け替えて森全体を俯瞰するも良しかと思う．研究者個々人の嗜好の問題であろう．私の場合は，以前ある学会誌に「研究テーマをもう少し絞り深く追求し，専門性をより一層高めることを今後の指針にしたい」と書いたことがある．当初の「専門バカ」になるという憧れは現在でも抱いている．今一度自分の専門領域を見つめ直し，限りある研究生活の中で究めていきたいと思う．

[1] 岡山大学大学院環境生命科学研究科